

UTaTané 団体紹介

代表 加藤 多笑(東大・教養)

副代表・相談役 久保田 祐貴(東大院・情報理工)

副代表 加藤 昂英(東大院・理)



科学や学問の新たな「伝え方」をデザインし、実践する。

展示制作・科学イベント運営・論文発表までを一貫して行う、学生主体の「研究室」的組織

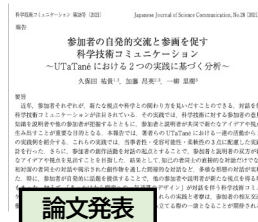
なぜ、新たな「伝え方」が必要なの？

科学や学問と社会との関係が多様化・複雑化
e.g. コロナ禍をめぐる問題、原発安全神話の崩壊



学問の様々な側面を、様々な方法で伝え、
様々な価値観をもつ人々が、ともに考える場を作りたい

UTaTanéに入るからこそできること



- ✓ UTaTanéが進化させてきたベースを利用して、
個人の興味をいかしたアイデアを作り、展示などの形に！
- ✓ 様々な専門の人がいる縦に長い団体内での議論で視野を広げる

UTaTanéに入るとできること

アイデアから実践開発、对外発表まで一貫して行っている

アイデア・展示案考案

「伝わるデザイン」に
自身の伝えたいものをのせる

展示案は活動日などで議論

筋の良いアイデアや展示案を
考えるノウハウを提供可

実践開発・運営

実際の展示や体験を
どう作れるか？

展示開発を行う資金を提供可

アプリ開発・展示開発の
ノウハウを提供可

对外発表・論文執筆

作成した展示や体験を
「形」に残す

对外発表や論文執筆を
戦略的に行う

論文調査や執筆をサポート

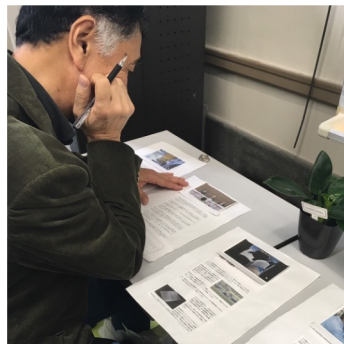
- ✓ 全体活動日(月1回): プロジェクト報告・新規実践の運営について
- ✓ UTaTanéゼミ(月1回): 論文を皮切りに、様々な学際的話題を議論
- ✓ その他ミーティング(随時): 個別のイベント運営, 論文執筆, 对外プロジェクトについて

展示・対外発表の例

展示例:

ねじ曲げ見出し
ウソを作って考える「メディア・リテラシー」

「ついクリックしてしまいそうな」見出しを考える
→発信者の視点から、情報のねじ曲げ方を眺め分析する



発表例:

論文誌『科学技術コミュニケーション』掲載

科学技術コミュニケーション 第28号 (2021)

Japanese Journal of Science Communication, No.28 (2021)

報告

参加者の自発的交流と参画を促す
科学技術コミュニケーション
～UTaTané における 2つの実践に基づく分析～

久保田 祐貴^{1,3}, 加藤 昂英^{2,3}, 一柳 里樹³

要旨

近年、参加者それぞれが、新たな視点や科学との関わり方を見いだすことのできる、対話を伴う科学技術コミュニケーションが目ざされている。その実践では、科学技術に対する参加者の意見や知識を説明者や他の参加者が把握するとともに、参加者と説明者が共同で新たなアイデアや視点を生み出すことが重要な目的となる。本報告では、著者らのUTaTanéにおける一連の活動から2つの実践例を紹介する。これらの実践では、当事者性・受容可能性・柔軟性の3点に配慮した実践設計を行った。さらに、参加者の創作活動を対話の起点とすることで、参加者と説明者の双方が新たなアイデアや視点を見出すことを目指した。結果として、知己の者同士の直接的な対話だけでなく、初対面の者同士の対話や提示された創作物を通した間接的な対話など、多様な形態の対話が実現した。特に、参加者が自発的に話題を提供することで、他の参加者や説明者が新たな視点を得る場面もあった。加えて、「きっかけから探究への一貫貫のデザイン」が対話を伴う科学技術コミュニケーションを行う上で重要であることが示唆された。これらの実践と考察は、参加者の相互交流や参画を促す実践を行う上での試金石となり、実践を組み立てる際の一助となることが期待される。

久保田祐貴, 加藤昂英, 一柳里樹: 参加者の自発的交流と参画を促す科学技術コミュニケーション～UTaTanéにおける2つの実践に基づく分析～, 『科学技術コミュニケーション』28号, pp.61-74 (2021).
https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/80614/1/JJSC28_061-074_KubotaY.pdf

★ 自然の驚異が脅かす科学の権威

自然と科学の対立を荘嚴な雰囲気で伝えたかった たか

★ 貴方も!? コロナが弄ぶ科学と情報の闇

心配と恐怖は、人間の生存欲求本能を強制的に反応させる ひよひよ

★ あなたは この記事も鵜呑みにしますか?

善悪の情報伝達が本当はほころびの元かもしれない怖い にやんで 連戦

★ 科学は死んだ

死んだなんて書いてないけど死んだことにしちゃえ やゆ 通信社

UTaTanéが目指す、理想の実践

(注:あくまで現時点での理想であり、常にアクティブなメンバーが目指す「価値」を生み出していく)

1. その場の「面白さ」や「魅力」で終わらない実践

展示から「タネ」を持ち帰り、家や学校での自然な会話を通じて、花が開いていく

※参加者が長時間を過ごす、学校や家で展示を思い出し、展示の問いかけが続いていくことが重要

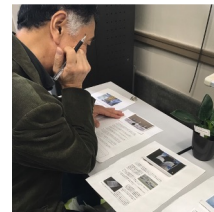
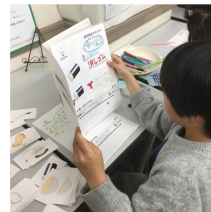


2. 明日からの「世界の見え方」が変わる実践

展示を通して、それぞれが「疑問」や「体験」を持ち帰り、考え続ける

※その場の楽しさで終わらない。「見え方」が変わると、参加者自身が新たな発信者となる可能性も秘める

※参加者とスタッフ双方の「これまでの経験」を価値とし、体験を通じて「これからの経験」へと自然につなぐ



3. 大人も子供も、スタッフも参加者も、それぞれが体験し、考え、楽しめる実践

異なる背景を持つ参加者同士やスタッフの交流を通して、科学や学問に新たな「つながり」を生み出す

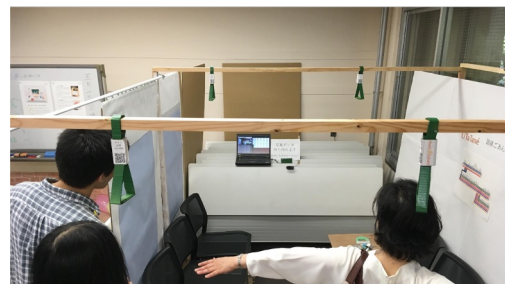
※SNSでの閉鎖的な「情報の生態系」が生まれてくる中で、異なる価値観を知り、理解し、ともに考える枠組みを作ることは極めて重要

※参加者自身も気づかないような「過去＝人生」の経験を引き出し、参加者自身が楽しみ、考えながら、一人一人の「未来」にまで寄り添えること



活動実績:2018年度「未来の生活」

変わる世界、変わらない私 ～20年後の未来を描く～



- ・「生活空間の再現」により「専門家ー非専門家」や「子どもー大人」といった壁を感じることなく対話できる場を提供
- ・「対話」に加え、「生活知に基づくアイデア構成」まで達成



社会実装のアイデアを、WS形式で幅広く・深く引き出すデザインが可能に



活動実績:2019年度「創造性」

「つくる」ってなんだろう? ~How Do YOU Create?~



・生活知を引き出す対話デザインの方法論を確立

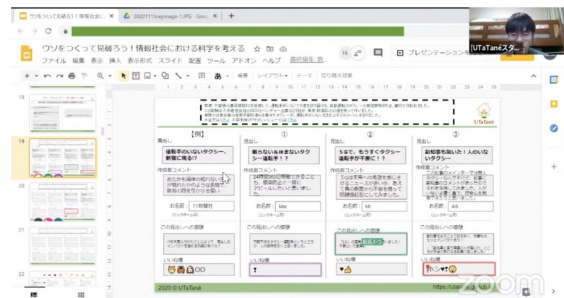
- (1) 受容可能性:「自分が参加しても良い」という感覚を与えること
- (2) 当事者性:科学や学問を自分の価値観の中に捉えること
- (3) 柔軟性:参加者の回答に応じて、対話の内容を柔軟に変化させること

☑よりアクティブな活動の中で、科学や学問を考えるきっかけづくりに成功



活動実績:2020年度「科学の相対化」

見える世界、見えない世界 ～科学と私をつなぐもの～



科学色 (SCIENCE)

理科の教科書の色	自然	緑	空のイメージ	宇宙の色	緑
無限の可能性	電気のイメージ	自然	空	自然の色	まっさらな心で読む
理科の教科書の机の色	緑	緑	緑	緑	緑
多くの知識はこんな色	よくわからない色	緑	緑	緑	緑
神秘的でキラキラした感じ	緑	緑	緑	緑	緑
サイエンスのイメージ	緑	緑	緑	緑	緑

科学技術コミュニケーション 第28号 (2021) Japanese Journal of Science Communication, No.28 (2021)

報告

参加者の自発的交流と参画を促す 科学技術コミュニケーション ～UTaTanéにおける2つの実践に基づく分析～

久保田 祐貴^{1,2}, 加藤 昂英^{1,2}, 一柳 里樹¹

要旨

近年、参加者それぞれが、新たな視点や科学との関わり方を見いだすことできる。対話を行う科学技術コミュニケーションが目ざされている。その実践では、科学技術に対する参加者の意見や知識を説明者や他の参加者が把握するとともに、参加者と説明者が共同で新たなアイデアや視点を生み出すことが重要な目的となる。本報告では、著者のUTaTanéにおける一連の活動から2つの実践例を紹介する。これらの実践では、当事者性・受容可能性・柔軟性の3点に配慮した実践設計を行った。さらに、参加者の創作活動を対話の起点とすることで、参加者と説明者の双方が新たなアイデアや視点を見出すことを目指した。結果として、知己の者同士の直接的な対話だけでなく、初対面の者同士の対話や視座された創作を通じた間接的な対話など、多様な形態の対話が実現した。特に、参加者が自発的に話題を提供することで、他の参加者や説明者が新たな視点を得る場面もあった。加えて、「きっかけから探究への一気通貫のデザイン」が対話を行う科学技術コミュニケーションを行う上で重要であることが示唆された。これらの実践と考察は、参加者の相互交流や参画を促す実践を行う上での試金石となり、実践を組み立てる際の指針となることが期待される。

¹久保田祐貴、加藤昂英、一柳里樹、参加者の自発的交流と参画を促す科学技術コミュニケーション～UTaTanéにおける2つの実践に基づく分析～、科学技術コミュニケーション28号、pp.61-74 (2021)。

・オンラインイベント、学会発表・論文発表、共同プロジェクトを新規展開

- (1) サイエンスアゴラ2020企画、東京大学五月祭・駒場祭などで多様なオンラインイベントを展開
- (2) 論文誌採択を含む、学会発表・論文発表の戦略的展開
- (3) 学内外の団体や個人と共同プロジェクトによる展示開発を開始

☑当団体の活動による、学術コミュニティを含む多様なコミュニティへの貢献を実現

活動実績:2021年度「言葉と心」

伝えることば, 伝わるころろ ～科学と世の中とそのあいだ～



ぼわぼわ	チリンチリン	ブシュー	ぐおおぐおお おおジキ	チリンチリン	ゴー
シュー	シューシュー	ギギー	ブシュー	ぶしゅー	こしゃー
ゴーゴー	ソワソワ	ソワソワ			

回答結果はこちら！

▶ 0:00 / 0:02 ◀

< 音声を開くのが難しい方は、このボタンをクリック！ >

文字を見る








1票

2票

1票

0票

6票

3票

- 厚みのある荷物もポストから
投函口 あんぐり
- 日本郵便 ポスト投函口を拡大 フリマが便利に
日本郵便 ポスト投函口を拡大 郵便物紛失の恐れは？
HakNews 何らかのリストを掲載し、注目を受ける
- フリマアプリ利用者に朗報！口の大きなポスト設置へ
大型荷物対応へ！大型ポスト設置へ！
YM ニュース 異出日でも不異出日でも大して変わらない明
- 新しい時代に応えるために、変わる郵便箱
ポストコロナに郵便ポストはこう変わる！
京都中央 通信社 同じ言葉を入れて顔を読みとりました
- ポストの投かん口を拡大 フリマアプリ普及で需要高まる
メルカリに負けるな！ 今風のポストに込めた、驚きの工夫とは？
シナモン 新聞社 メルカリと勝負しているんだというストーリーを作った。

・オンラインイベント開催手法の向上, 科学技術コミュニケーションへの問題提起

(1) サイエンスアゴラ, オンライン学園祭への出展

→オンライン展示による時間非同期的交流 等.

(2) 科学教育ボランティア研究会での発表, 論文化に向けた活動